
頭痛

P A B R O F

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頭痛

【Nコード】

N2899D

【作者名】

PABROF

【あらすじ】

僕はずっと頭の中がスツキリしないんだ…

悪夢

私の悪夢が大蛇になって貴方に届きますように…

貴方は私の事だけでいいのに、貴方の命は私だけに燃えればいい。
貴方の時間を貴方が生きて貴方の為に貴方が貴方をしているのが許せない。

鼠の大群が逃げて行く、貴方の全ては私の為じゃなきゃいけないの…。

私の頭が重くなる、ふくれていくの。この体ではもう足りない。

頭痛その1

頭の中が自問自答と自己嫌悪で埋め尽されていく、何時もなら布団をかぶって無理矢理寝てしまふのだが今日は何時もより頭が重い、朝からずっと耳鳴りが止まない、少し気になっていたがたかが耳鳴りいずれ止むだろうと思っていたが徐々に徐々に耳鳴りの音が大きくなってきたのに気付く。

自分の意識よりも先に頭が発狂し始める。小刻に震えだした頭はどんどん激しく動き始め首から上だけがまるで早送りのように上下左右ランダムに踊り始めた、頭の中は爆音のノイズ、目、鼻、口、耳から唾液、鼻水、涙、汗、体液が勢い良く部屋のあちこちに飛び散る。

びちょびちょの部屋の中、僕はどこか上の方から自分を見ている気持でボーっとしていた、音や意識がばやけている、グイっとな僕を正気に戻したのは股間の温かい温もりだった。自分一人の部屋の中僕は恥ずかしくなってサッと股間を隠して顔を赤くした。

頭痛その2

今日が終わる直前僕はいつくばっていた、気は狂う寸前、きっとこのまままた1日死に近づくがそんな事はどうでもいい、視界はやけに狭い、部屋中に転がっていた陰を食べ始めたが僕の中にはもう充分にこの世の陰が溜っていたのであるうか、全て吐き出してしまった。

吐き出して少し物足りなくなった僕は外に出た。暴力を探しに、それと理由はもう一つあった、僕の硬く膨れ上がったペニスを平常心に戻すために。

きつかけは直ぐ見つかった、外に出た途端一人の女が僕の前を通りすぎた、僕は何も考えず女の髪の毛を鷲掴みにし一心不乱に振り回し引きずり回した、きつと周りから見たら僕は素敵な舞いをしていただろう、そんな自分に酔いしれていたら女の首はもげてしまった、頭だけになり便利になった女に僕の硬く膨れ上がったペニスをくわえさせた。

しばらくすると目の前はカラフルになりグルグル回り始めた、今までにないオーガズムに襲われた僕だったがふつとある事に気付く、今日は陰しか口にしていない。

「糞女、僕の精子を返せ！感情の一つを食べられた気分だ。」

次の日、女の顔をボコボコに殴ったせいか両手が有り得ない位腫れていて何をするにも不自由だった。しかしもしかしたらこれを機に器用な人間になれるかとも思い心が弾んだ。

頭痛その3

今日も一体何に期待をして生きているのであろうか、乱雑な部屋の中冷たいソファにだらしなく体を預けたままだ息をしていた。思考回路停止、まさにソファと一体化する寸前に人間を辞める決意が付かず一体化する事を拒んだ僕はここに居てはソファになってしまふと思いい立ち上がった瞬間お腹に違和感を感じた。急に視界にパチパチと白い亀裂が入る、しかし今このまままたソファに座る訳には

いけない、今ソファに座ってしまったたら僕は絶対ソファになつてしまふと悟った、案の定ソファは針と糸を持って僕の様子を伺っていた。お腹はドンドン膨れ上がり重くなっていく、フラフラしながらもトイレの方に向かった。

しかしその道は辛く厳しく一歩足を前に出すとガツンと頭を流れる電気、そのたび僕は耳に詰まった水を出すかのようにトットトットとよるめいた。その間もお腹は膨れ上がっていく、いつも後ろ向きな僕がこんなにも前に進みたいと思ったのは生まれて初めてかもしれない、一歩足を前に出すと右によるめき、一歩足を前に出すと左によるめく、多分こんなに頑張つてトイレを必要としているのは今世界で僕一人だと思つとアナーキーな心を擲った。

やっこの思いでトイレのドアノブに手をかけた時いつもの僕の悪い癖が出た、僕はどうしても最後の最後でツメが甘い。

ドアノブに手をかけそれをゴールと勘違いしてしまい気を緩めたため体から気力が抜けてしまった、ソファからトイレまで気力のみで来た僕はその場に倒れてしまった。お腹と頭の間はくつきりとしていてそれだけで死んでしまいそうだった。パンパンになったお腹が割りとあっけなくパツクリ口を開けると中から出てきたのはスイカだった。そういえば僕のお祖母ちゃんがこんな事を言つてたのを思い出す。

「スイカの種を食べるとお腹の中にスイカが出来ちゃうよ。」
なるほど、今日はお祖母ちゃんのお墓参りに行こうと思った。

頭痛その4

暗闇は想像力を膨らます力を持っている気がする、僕は自分の想像力に怯え暗闇を怖がっている、そんな夜に限って誤魔化すものがない。現実を直視するほどタフな夜でもない、こめかみが鈍くなり頭に隙間が無くなる。何か酒やガンジャの代わりになるような物はないかと部屋を今以上に散らかした僕はクローゼットの中にあるものを見つけた。

そこには小さな都市が出来ていた、小人の都市、小人達は僕を見るなりペコッと頭を下げたり、こんばんは〜と挨拶したりそれぞれ僕に挨拶をした。僕もどうもと一人一人に丁寧に挨拶をした。そこで僕はそういえば今日初めて喋ったなあと気が付いた。僕は何の躊躇いも無くその都市をプチツと踏み潰した、プチツと。

一気に頭が重くなった、ズンズンと鈍い痛みが静かに続く。

頭痛その5

爆音が欲しい、一瞬で全てが吹き飛んでしまうような、世界中のエネルギーを全て使ったとびっきりの爆音が欲しい、それは一瞬の衝撃で全て、一瞬のメロディで全て、始まりが終わり。その爆音で僕はコナゴナになる、全て報われる。僕の願いは一瞬で終わる、爆音で笑う。

悪夢その2

逃げる、逃げる、鼠が。蜂に囲まれる、嗚呼出口がまた閉まる、此処は大蛇の腹の中、溶けていきながら私は貴方を想い欲情する。貴方の時間は私の為に落ちていかなきゃいけない筈なのに。見て、私髪の毛だけになっちゃった。

頭痛その6

もう僕の頭痛は治らないのかもしれない、夢の中で落ちていた髪の毛にすがり泣いて何度も何度もご免なさい、ご免なさいって誤っていた、そうか、あれが僕の全てだったのかもしれない。

夜が僕を異次元へ連れていく、行くな、逝くな、待ってくれ、僕の

この忌々しい悩める頭痛を持つていつてくれ。

夜よ、闇よ、僕を救ってくれないか。頼む、美しいノイズ、体が壊れる程の爆音、乗っけてくれそのスピードに、今夜は良く香るリズムが聴こえる、開いていく頭の中で光が開いていく、燃えていく、頭の中の闇が燃えていく、待ってくれ、闇が燃えていつてしまふ、怖いよ、眩しいよ、頭が、頭が：涙と一緒に夜が行ってしまう、黒い涙。

（後書き）

目を通していただいております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2899d/>

頭痛

2010年10月15日19時22分発行